

晴天の友

この頃或る人の書いたウィリヤム・ペンの伝記*を読んだ。ペンが、クウェエカアであり、ペンシルヴァニア州の建国者であることは知られているが、彼はまた国王ジェームス二世の親しい友であった。一六八八年、英国の貴族等は、王の妹婿で新教徒であるネザアランドの太守オレンジ公ウィリヤムを招き、ウィリヤムはこれに応じて兵を率いてイギリスに上陸した。ジェームスはフランスに逃れ、ウィリヤムは王位に即いた。これが所謂いわゆる光栄革命である。ジェームスの廷臣等は、或るものは王とともに逃れ、或るものは王を捨てて去った。ひとりペンは公然ロンドンに留まっていたところが、一日囚えられて吟味を受けることになった。廃王ジェームスと相通じてその復位を謀ったという嫌疑である。

証拠として示されたのは、ジェームスがペンに与えた信書である。王は何ゆえに彼れに通信したのであるか。ペンは答えて曰う。「私は知らない。けれども王が私に手紙を書きたいと思うなら、それを止めることは私には出来ない。しかし私は、私がジェームス王を愛したことを充分告白する——そうしてもし私が彼れをその繁栄の時に愛したとすれば、今その逆境に在る彼れを憎むことは出来ない。しかしながら彼れの頭上から落ちた王冠を彼れに取り戻そうと試みることは考えたこともない——従って書簡中の記載には一として私に罪を負わしめるものはない」**と。

この、彼れをその繁栄の時に愛したとすれば今その逆境に在る彼れを憎むことは出来ない、という言葉は気持ちがいい。英語に *fair weather friend* という熟語があるそうである。それはペンの場合の正反対を指すので、訳せば晴天の日の友、順境の友とすべきもの、反対の方からいえば、逆境の人を離れる友である。

どうかこれにはなりたくないものである。

(後略)

* ヴァイニング夫人著・高橋たね訳『民主主義の先駆者ウィリアム・ペン』昭和二十五年刊、岩波新書。原著は、“PENN” by Elizabeth Janet Gray (Viking Press, 1938) 本巻三五五頁***参照。

** “I know not,” Penn replied. “But it is impossible for me to prevent the King from writing to me if he choose to do so. I confess freely, however, that I loved King James—and if I loved him in his prosperity I cannot now hate him in his adversity. But I have never so much as thought of trying to restore to him the crown which has fallen from his head—and so nothing in that letter can in any way bring guilt on me.”

*** ヴァイニング夫人著『ウィリアム・ペン』邦訳本の序

ウィリアム・ペンという名はまだ十分日本人に親しまれていない。ペンがクウェエカアの先達の一人であり、米国ペンシルヴァニア州の建設者であったということ以上には、多く知られていないであろう。吾々はこの人についてもっと多くを知るべきであると思う。

ウィリアム・ペンとは如何なる人か。彼れは十七世紀のイギリスで、有名な海軍提督にして貴族に列せられた人の子であって、そうして同時に、宛かもその頃平民の間に起ったクウェエカアの教えに帰依した人であった。彼れは一方国王の親友であり、他方幾度か牢獄に入出した。彼れは一たび軍人たらんと志し、また自ら優れた剣士でありながら、思い定めて剣を捨て、平和の主義に徹底した人である。彼れがイギリスとアメリカの歴史、殊にアメリカ建国史の上に如何なる大きい足跡を遺した

か。彼れの思想と実行とがアメリカ民主主義の伝統と制度の上に如何なる影響を与えたか。彼れがペンシルヴェニア建国に際し、いかに真義をもってアメリカインディアンを遇し、またいかに彼等によって尊信せられたか。そうして何よりも第一に、彼れが人の子として、夫として、父として、如何なる人であったか。それは著者ヴァイニング夫人が具さに語るところであるから、私は読者にただ速かに本書の本文に進むことを薦めるに止める。

アメリカの文壇ではエリザベス・ジャネット・グレイの名をもってよりよく知られている著者ヴァイニング夫人の文章は、平明で、簡素で、美しい。殊に夫人の叙述の間に、特殊の歴史的感覚、歴史的感慨ともいべきもののただよう章節を私は好む。夫人の作品である「旅の子アダム」や「若きウオタア・スコット」に度々それを感じたが、史譚である本書には、当然その特徴が著しい。主として若い人々のために書かれた夫人の幾多の作品が、あらゆる階層、年齢層の人々によって愛読されるのは少しも意外でない。

(後略)

(単行本として最初の刊行は『朝の思想』、雲井書店、1952)

「信なきものは去る」

野球の序でもう一つ。

野球に限らないが対校競技の応援学生で、味方の旗色が好いと騒ぎ、悪くなると、ゾロゾロ帰りかけるものがある。いかにも頼もしくない仕業である。競技の応援など、どうしても好いことで、野球の応援者のみが愛好者でないことは、いうまでもない。けれども、来なければ兎に角、来て応援をしながら、旗色の次第によって、友を非境に見捨て去るというその料簡には、何か誠実を欠いたものがあるように思われる。これは私だけがむずかしく考えるのかと思うと、決してそうではない。

戦前の或る時、アメリカ法学界の泰斗として尊敬されていたヴィグモア博士と、東京で一緒に野球仕合を見たことがある。この人は、六十余年前、慶應義塾が初めて大学部を設けたときに、招聘されて来て、その法律科の主任教授となったのであったが、殆ど半世紀を隔てて再び来朝した。慶應にとっては、謂わば塾賓のようなものであるから、私は毎日のように方々随いて歩いた。野球が好きで、昔、横浜外人ティームのショウトもやったということであったから、或る日、神宮外苑の仕合に案内した。ところが、丁度この老博士の見ていた前で、旗色の悪くなった方の学生が立ってゾロゾロ帰りかけた。博士は苦がり切ってしばらくそれを見ていたが、独語のように、「faith (信) なきものは去って行く」といった。それは正に私の言わんと欲するところであった。

仮りに海上で船に浸水が起り、乗員一同ポンプに取りついて排水に努めているとする。排水は成功するかも知れぬ、しないかも知れぬ。しなかった場合、ポンプに取りついていたものは、逃げ損うかも知れぬ。この時、機を見るに敏、もしくは過敏なるものがあって、仲間の心づかぬを幸いに、自分だけ助かるうとしてボートを卸したらどうであろう。更に排水が成功して、船が助かったとき、その男がまたボートから本船へ乗り移ろうとしたらどうであろう。勿論船の排水と、野球の応援とは同じでない。けれども同じく友を非境に見捨て去るところに、或る共通があるとはいえるであろう。ウィグモア博士が「信 (フェイス) なきもの」といったのは道理である。

(後略)

以上、英文を除くすべての文章は、次の書に基づく：

小泉信三全集15『平生の心がけ』文藝春秋社、1967。